

市民の森づくりが地球を救う

NPO緑のダム北相模の森づくり三原則

取材／構成＝LANDSCAPE DESIGN 協力＝NPO法人緑のダム北相模

地球環境問題を取り上げたアメリカ前副大統領のアル・ゴア氏のドキュメント、解説「不都合な真実」は映画や出版になり、全世界に大きな波紋を投げかけた。地球温暖化で地球環境に大異変が起きていることは周知の事実である。

今われわれはグローバルな視点を持ち、活動は足元からしていくことの大切さを問われている。

「環境（森林）破壊という負の遺産を子孫に残してはならない」をモットーに神奈川発地球の森林を救え運動を展開しているのがNPO法人「緑のダム北相模」である。

2005年8月にNGOの国際認証機関FSC（森林管理協議会）の認証を市民ボランティア団体として日本で初めて取得した。市民活動で取得した例は世界でもまれらしい。

本誌ではこのNPO法人「緑のダム北相模」を2回に分けて前編は森づくり三原則、後編はFSC認証の森づくり手法として紹介していく。



わずか325年でこの地球から森林がすべてなくなってしまう。

FSC (Forest Stewardship Council) 本部に石村黄仁氏が送ったメッセージ

石村氏を中心とする会の活動の理念はFSCの本部に贈った「神奈川発地球の森林を救え」の次のメッセージによく表現されている。

「NPO法人緑のダム北相模は東京や神奈川など都市市民の森林ボランティア活動のグループです。私たちが管理する『若柳・嵐山の森』は日本で23番目の『FSC認証林』になりました。世界では710番目でしょうか。市民のボランティア活動がFSCの認証を取得した例は世界的にも珍しいそうです。

1998年11月に活動を開始して8年が過ぎます。毎月2回の定例活動を設けて「雨でも休まず、急がず、無理せず、ゆっくり、ポチポチと」をモットーに森林整備を続けて8年目の2005年10月にFSCの認証林になりました。

都市市民の私たちが何故、FSC認証に挑戦したとお思いでしょうか。

地球の森林面積39億ヘクタール

毎年減少している森林面積1200万ヘクタール

計算上ではわずか325年でこの地球上から森林がなくなってしまうという衝撃的な事実を知ったからです。

空気・水を供給してくれる森林がなくなれば私たちの子孫は滅亡です。

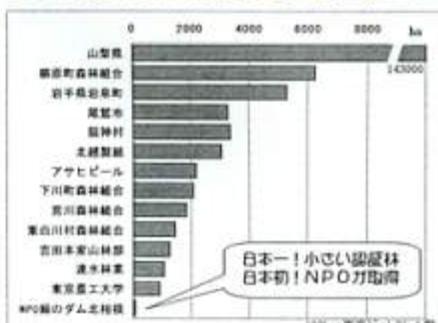
身近に起こっている問題として、地球温暖化、異常気象、都会に暮らす私たちこそ森の大切さをもっと知らねばならないのです。

1992年のリオ環境サミットでカナダの少女が

訴えた一言『オゾン層の穴をどうやってふさぐのですか。砂漠になった場所にどうやって森を蘇えらせるのですか。直す方法がわからないのなら壊すのはもうやめてください』この一言に触発され1993年に『NGO森林管理協議会：FSC』が誕生した事を知りました。

世界中の市民こそが環境問題、森林保全に立ち上がりなければ325年はもうすぐそこにせまっています。私たちは森林破壊という負の遺産を子孫に残してはならないのです』

森づくりはすなわち、環境づくりである。地球環境に強い危惧の念を頂く緑のダム北相模は、自分たちにできる地球環境改善策が森づくりであることを強調する。地球温暖化の主な原因となっている二酸化炭素の吸収源である森林を保全し、森と人間社会が健全な環境を共有することを目指して、森林活動に情熱を傾ける。



国内の認証森林と面積
(2003年9月現在、作図/NPO法人緑のダム北相模)



FSCラベリングの例

FSCとは、Forest Stewardship Council（森林管理協議会）の略号です。ドイツに本部を置き、環境への配慮など一定の規準に沿った審査をクリアした森林を認証します。認証されるとFSCのロゴマーク（右図）を使用し、林産物の差別化を図ることができます。



FSC本部から贈られたFSC認証林の認定証



活動基地の若柳・嵐山

相模湖(相模ダム)は富士山に源を発し、相模湾に注ぐ相模川(桂川)に作られた人造湖で古くから神奈川県民の「水がめ」として利用されてきた。都心からおよそ1時間の所とは思えない風光明媚な森と湖のまち相模湖町に、NPO法人「緑のダム北相模」の基地がある。駅を降りると、東側にそそり立つ京都の嵐山に似た円錐形の山が若柳・嵐山の森である。

活動場所は405.9mの山頂から相模川岸標高120mに広がる扇形の北面・西面斜面である。若柳・嵐山の森で森林ボランティア活動している対象面積は41.8haの私有林である。主要樹種はスギ17ha、ヒノキ4.5haで、その他の広葉樹は18.9haである。

神奈川県の上位計画である「神奈川地域森林計画」では「資源活用型水土保全林」に区分けされており、県独自の施策である「かながわ森林づくり計画」では「森林の森づくり事業」の対象地になっている。また若柳・嵐山の森の64%、約26.8haは保安林に指定されている。



上／さがみ湖駅前から見た若柳・嵐山
下／若柳・嵐山の航空写真（1996年10月18日撮影）

活動の経緯

1998年2月、知人の紹介で見た森にその後再度訪れた石村黄仁氏が相模湖の貝沢の森を歩いていた折、「森が静か過ぎる」と感じ、生き物の気配もなく、密植した薄暗い森を見て不安を覚えた。その後その事が気になり、日本の森林の実態を調べ荒廃していく森林の現状を目の当たりにして、いてもたってもいられず、同年の8月に石村氏を中心とする有志数人で森を救う活動を決意し、数々の活動拠点「相模湖・与瀬の森」を確保する。そしてWWFジャパンの前沢氏の紹介で、NPO法人の森づくりフォーラムに指導をお願いして、月一回の定例活動をスターさせた。その後会の活動に対して、地元の人達から「よそ者が山に入って勝手な事をしている」と誹謗中傷され、活動の場所を幾度か変える。そして継続は力なりを感じ、嵐の中でも山に入っているひたむきな姿を地元の人が見て、地元と会の信頼関係も生まれ、ようやく2000年8月に地元の中島氏の紹介で鈴木重彦氏（前NPO法人緑のダム北相模理事長）の所有する60haの若柳・嵐山に活動拠点が定着することとなった。さらに、同会の「森林保全は

地元住民と行政の支援・協力なしではできない」という考え方の下、活動の範囲を上流、中流、下流の流域に広げる。そして、相模湖町、神奈川県との連携を図り、山の所有者の鈴木重彦氏を理事長に地元5名の参加を得て、NPO法人「緑のダム北相模」を申請し、2002年7月に認証を取得する。5年がかりで準備していた大きなチャレンジのFSC認証取得を目指して、2002年4月から、生態系調査3カ年計画を立て、生態系調査専門家の篠田授樹氏をリーダーとして樹木調査専門家の林将之氏ほかFSC認証取得チームを編成し、SGS審

査機関の指導の下、取得計画を遂行する。そして2005年10月にFSCの認証を市民ボランティア団体として、日本で初めて取得することになった。

現在も4年後の再審査に向けて、FSCのガイドラインに沿った森林整備の活動を継続しつつ、新たに参画した日本大学の桜井尚武研究室でモニタリング活動を計画中である。また、若柳・嵐山の対面に位置する小原本陣の森で、1年前から担い手育成を目的に現理事長の永井宏一氏のお世話で、新しい活動の場としての森林整備もスタートした。



左／山主の鈴木重彦氏（左）に報告する石村黄仁氏



右／ご子息の鈴木史比古氏（右）に挨拶する会員た

FSCガイドラインに沿った森づくり三原則

森づくり三原則

環境：森をつくる　社会：森とつなぐ　経済：森を活かす

この会の活動はFSCの国際認証を取得する事を自己目的化するのではなく、「若柳・嵐山の森」の持続可能な保全と再生の方法をFSCのガイドラインに沿った活動の指針を立て、市民だけで森林の管理・保全が可能なことを実証することにあった。
「空気・水を供給してくれる森林は特定な人のみが考えることではない」という石村氏の理念に基づき、普通の人々による森林保全の方法を探ることにあった。
森林という地域の資源を社会的財産として価値を引き出し、環境の側面から森をつくる、社会的側面から森とつなぐ、森にお金を戻す経済的側面から森を生かす活動を森づくり三原則として多様な活動を展開している。



手入れをして蘇った若柳・嵐山の森

森をつくる／環境

森林整備・生態系調査・お花畠づくり・養蜂

森林整備（若柳・嵐山の森、小原本陣の森）

森をつくる活動の基本である森林整備として下草刈り、除伐、枝打ち、間伐、林道整備、伐出などの活動を年間スケジュールを立て、定期的に行っている。また神奈川県の委託事業として「協力協約事業」や昨年は共同事業として植林事業なども行った。

2年前から本格的にこの森の対面にある小原地区の森でも森林整備の活動がはじまった。この森は、若柳・嵐山と異なり森林所有者が多数いる。個人の承諾を取り、「協力協約事業」の森林整備を手がけつつある。

若柳・嵐山の森は里山交流の森づくり、小原本陣の森は担い手育成の活動の場とし位置づけている。FSCのガイドラインは森林の管理のための基本的な作業が環境や地域社会に配慮してシステム的に正しく行われていることが前提となる。



上／小原本陣の森の尾根道からの美しい眺望
下／小原本陣の森入り口



森の案内マップ（作画：澤田真理氏）

生態系調査

多くの生物がすむ豊かな森であることがFSCのガイドラインに沿った活動であり、生態系調査が3年計画で行われた。調査には篠田樹氏(地域自然財産研究所)をリーダーとして、樹木調査の専門家の林将之氏らも参画して、ボランティア有志も加わり本格的な生態系調査活動を行った。嵐山に生息する主要な動植物の目録づくりから始まり、高等植物、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類、底生動物、土壤動物などが調査されていった。

嵐山にはフクロウやキツネといった猛禽類や、関東近郊の里山を代表する野ウサギ、ムササビ、アカゲラ、オオムラサキ、ノコギリクワガタなどが生息する。こうした生物を絶滅させないためにも、森を調査し、どのように森の環境を保護していくのか探ることが重要となった。その後の生態環境についてのモニタリングシステムが、林氏と日本大学の桜井研究室のグループによって行われつつある。



若柳・嵐山の森 植栽図（作図：林 将之氏）



アカネズミの生け捕り



日本大学教授の桜井尚武先生（右）と研究室の学生たち

生態系調査3ヶ年計画

2002年度 基礎調査

- ・主要な生物種の把握（種リスト及び分布図）

・指標種の抽出

2003年度 環境評価調査

- ・貴重種の生育・生息状況の把握及び保全対策の検討

・生態環境現状評価及び望ましい将来像の検討

2004年度 森林施業計画の策定

- ・施業による生態系への影響評価と保全ガイドラインの策定

・環境モニタリングシステムの策定

望星の森

不登校などに悩む生徒が森の中で木を伐ったり下草を刈ったりして、自然に接することで、自分を取り戻し学生生活を楽しく過ごせるようになるのではないか・・・そう考えたのは東海大学付属望星高校の宮村教諭である。

4年ほど前から、緑のダム北相模には宮村先生をはじめとする2、30名ほどの生徒たちが訪れ、森林整備に奮闘している。同校では、この森林活動に参加すると修学の単位がもらえるということもあり、生徒たちも毎回楽しみにやってくる。現在は部活として認められ、単位に関係なく森にやってくる生徒も少なくない。

当初、藪と化していた森が彼らの努力で少しづつ開けていった。切り開いた所にはトチノキを植林し森づくりを体験していく。望星高校の生徒が受け持つエリアは望星の森と呼ばれて、同校のフィールドとして定着しているが、生徒の中には他の大人たちのフィールドにも参加していくなど、積極性が芽生えてきている。初めての生徒は平坦な場所での作業となるが、何度も来ている生徒は斜面地でも普通に作業をするまでになっている。ベテランの生徒たちは、自分たちは任せられているんだ、という誇りを持ち、責任感も持つようになった。

森には学校や社会とも違う自然のルールがある。それは他人との協力や地道な努力、忍耐、そして時には勇気を伴うことにもなる。自分勝手なことは決して許されず、これまでにない森の掟が、彼らに自分を発見させる機会となっているようだ。



左上／望星の森の案内板を立てる宮村達理先生と生徒さん
左下／望星の森のボサ刈をする生徒たち
右上／急斜面でのトチノキの植樹作業
右下／花壇にある仮植えのトチノキの移植作業

花畠づくり、養蜂活動

この花畠づくりは2002年3月にドコモの鉄塔工事で荒れた一部の敷地を里山風の花畠づくりを会の活動として始めた。

全体が傾斜地のため、桜田風花壇、森から移植した樹木や灌木、水はないけどせせらぎに見立てた流れ、果樹園など会員の自主活動で行っている。

今では地元の市民の散策路になっており、森の活動を理解してもらうための森への入り口として役立っている。またこの梅林で毎年参加者が野点などを楽しみ森の活動の交流や癒しの場にもなっている。その他会員の黒田氏がニホンミツバチの養蜂にも取り組んでいる。



上／地元有志による植え付け
下／造成前のドコモの鉄塔周辺の土地

せせらぎ見立て沿いのアヤメ、
ギボウシほか

養蜂の説明をする黒川さん



花畠にある梅林での茶会風景



里山風花畠全景

森とつなぐ／社会

都会の人々に森林保全の大切さを理解してもらうために、森に来て体験することを勧める。そして森で楽しみながら、理解を深める事で都会の人々と森をつなぐ活動としている。

緑のダム学校

緑のダム北相模には専門家に近い知識を持つ人が少なくない。植物や生態系から、建築、造園と幅広く、そうした多様で豊かな人々の知識を少しでも役立てるため「森の学校」がスタートした。学校の活動は、初めて森に訪れる人に基本的な知識を授け、その後の活動を楽しめるようにする体験学校や、森の生態系調査、樹木ツアーなど、気軽に参加できる学校がその都度催されている。

森の学校を始めた頃、FSCという目標もあり、生態系に詳しい篠田授樹さんをはじめ、専門家たちとともに森を巡っての学校が開催された。森の学校の校長・齊藤憲弘さんは、「学ぶといいうより、体験するという気持ちで参加していただき、自然に目覚めてもらいたい」と言う。

森には様々な機能や現象があり、そうした現実を見ながら森について考えていくことは、FSCではなくても非常に興味深い。例えば、森の整備をした所としていない所がどう違うのか、水を流して浸透する場としない場の違い、倒木がなぜ発生するのか、といったことが森を巡りながら学んでいく。

2006年は地元の小学校の生徒と先生が定期的に参加し、森の活動や遊びを体験した。先生は森では子供と同じ森の生徒となり、学校にはない子供との交流も可能となる。子供たちには自分から興味を持ってもらうため、上から教えるという姿勢を抑えている。一度、興味を持てばどんどん自分で調べたり質問したりするようになる。最初は興味本位だったが、半年ほど経つと、虫博士と呼ばれるくらい虫に詳しくなり、他の子供から一目置かれる子供も現れる。共同で取り組む作業は、友達との絆を強めるのに役立ち、森が子供の成長に大いに役立つことを知ることができる。

緑のダム北相模のメンバーはいろいろな人がいる。新しく加わる人もいるため、森の学校の先生も次々と入れ替わり、ユニークなカリキュラムが生まれる。今は虫に詳しい人が中心的な先生となっている。先生には事欠かないのが、緑のダム北相模のらしさである。



参加者をガイドする様のダム学校校長の齊藤喜弘氏



上／地元の桂川小学校の生徒さんと齊藤校長。昆虫博士の佐々木さん（右）
下／樹木専門家の林 稲之氏（右）の話を聞く参加者たち

緑のダム学校
連絡先／NPO 法人緑のダム北相模（事務局）
東京都世田谷区若林3-35-9
TEL & FAX 03-3411-1636
e-mail info@midorinodama.jp
<http://midorinodama.jp>

甲州古道復活事業

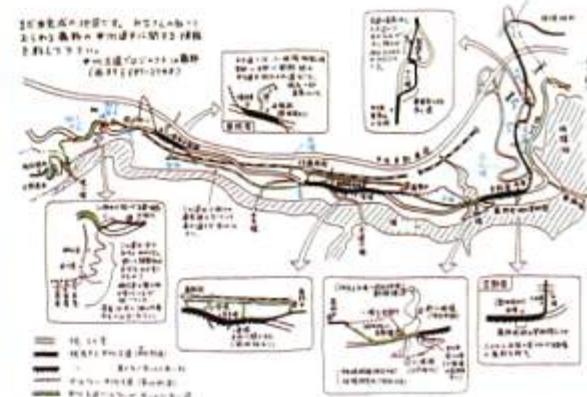
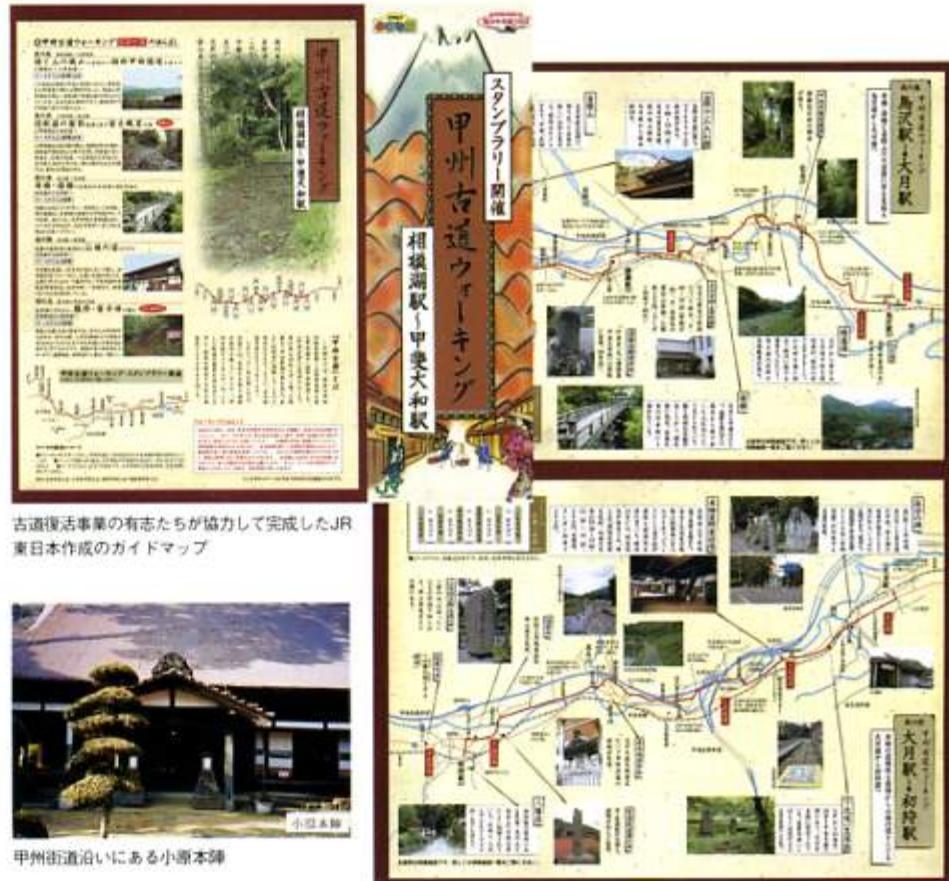
相模湖駅付近から山梨・笛子までの約60kmもの区間において、古道を調べて道標を建てる取り組みが行われている。相模原市では、当面、相模湖から上野原市境の間を整備しようと緑のダム北相模に協力を依頼。最初は、道標づくりの要請があり、森の間伐材(FSC材)を使って道標づくり行われた。

この要請がきっかけで、古道探しが始まる。役所や国土交通省では、何度も造り変わった道の経歴を調べるのは困難であるという。そのため地元の人や郷土愛好家、歴史研究家にも協力してもらい少しづつ解明していった。地元の中には古道ではいが、自分の足で何度も歩いて古い道を記録している人もおり、古道探しに興味を持ってくれる人が自然に集まってきた。

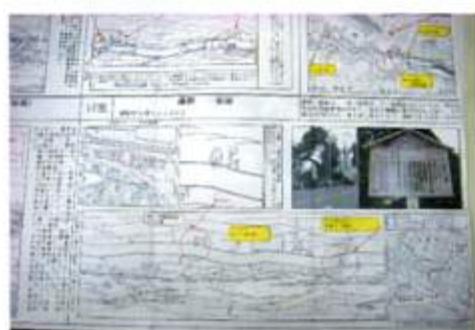
関心の高さは予想外に大きく、JR東日本が古道を歩くイベントを行ったり、相模湖町では町いちばんの観光コースにしようという計画もあるという。上野原では国道が遠く、古道を復活すれば町の観光に役立つと期待されている。だが、緑のダム北相模の齊藤さんは、「あまり大袈裟なことはやりたくありません。一度に大勢の人が歩いたら道が壊れたり、民家や自然が被害を受けてしまいます。そういう一過性の集客イベントでは長続きしなくなる可能性がある」と語る。

しっかりした地図と道標があれば、誰がいつ来ようと古道は歩ける。好きなときに自由に歩けるフリーウォークが甲州古道では尊重されているのである。誰でも自由に参加できるのは、甲州古道を調べる側についても同様で、森の仲間以外に地元の山主、市職員、教師、それに絵本作家などもいる。絵本作家は甲州古道の4つの宿場を舞台に4つの民話をとりあげ、それを紙芝居にして公演するという試みも行われた。さらに紙芝居には舞台が必要と、立派な木造の舞台までつくる人が現れ、つながりが広がっている。

道が復活すると、その近辺の見過ごされてきた古い構造物にも光があり、地域が見直されていることにもなる。古道については賛同する人が多く、道の持つ魅力の大きさに思い知らされる。



甲州街道(藤野町)マップ(作図:西村繁男氏)



「甲州道中分限絵図」(約300年前の街道奉行発行の実地測量絵図)「林鶴梁日記」「林鶴梁1806~1878の日記」「官遊紀勝」(約200年前の御典医渋江長白の紀行文、スケッチが多い)などを資料に、現在の「公園」や住宅地図までを比較検討して、甲州道中の歴史を紐解いた。



NPOが相模湖町から請け負った道標
(書:中里利夫氏)

上野原市で作った甲州古道案内板
(書:中里利夫氏)

森をいかす／経済

森をいかす活動は基地のFSC材を活用して製品化を図るとともに、相模川流域材を都市部に流通させ経済効果を上げ、森林の保全管理を持続的に行えるようする活動である。

流域材活用事業

都市部に流通させ経済的に持続可能な森林の維持・管理・保全を行うために、生産・流通・販売のシステムづくりとマーケットが行われている。相模川流域材を流通する仕組みづくりのために、大月・甲斐東部製材協同組合と協働でFSC認証林の材を製材して出荷販売し山にお金を戻す活動を行った。

また、基地から出る間伐材、端材は廃棄せず、ベンチ、ヒノキオイル、人形、小物などの製品化をはかり都市部のフェアで展示販売し、山に支援金を戻している。

流域材広報

森林保全運動の広報活動として、神奈川県との共動事業として毎年川崎ネイチャーフェスティバルを、神奈川県、山梨県、川崎市の後援を得て実施している。

また新たに市町村合併した相模原市から森林と都市をつなぐ活動として市民団体、林業団体、企業、行政連合の「若葉祭り」などに参画した。

流域をつなぐ協働活動

緑のダム北相模は神奈川県と山梨県をつなぎ、相模原市と川崎市を繋ぐことで、学際、業界、市民と協働で持続可能な森林保全と育成の方法を見出すためにNPOに何ができるか常に挑戦して行くことであろう。



上／会場で茶店の世話をする吉田美子さん（左）と石村スズコさん
下／会場で販売された兼松人形、木工品



流域をつなぐ協働団体



左上／川崎ネイチャーフェスティバルで挨拶する石村さんと主催者の千葉美佐子さん（左）。左下／縄引き体験を世話する吉田恒久さん 右上／川崎ネイチャーフェスティバルの会場風景。右下／製品化された学習机



左上／製材され出荷されたFSC材。左下／緑のダム北鎌倉を主宰している兼松まゆみさん。右上／国産材と一緒に当会の山から出荷されたFSC材を使用した兼松邸の改築（施工：金子工務店）
右下／会のFSC材が使用された天井



会の活動を支える石村夫人の名物なべ料理を手伝う伊藤さん



中上／現在の理事長の永井宏一氏とFSC材を管理する大坪浩一氏
中下／地元の石井さん（左）の好意で開かれた緊急救急講習会。右／森のコンサート。シタール演奏スマヤさん



FSC材に使用する会のシール